



Noguchi Times

Vol.
29
2022.11



高橋 佑也先生(写真右)／2022年5月～6月Externship @トーマス・ジェファーソン大学病院

CONTENTS

Philosophy ー私たちの想いー	01
医学生・レジデント向けイベント@ハワイ大学	02
Clinical Clerkship[Virtual]2022	03
ステロラ基金を通じて	06
女子栄養大学大学院入学生奨励 第8回『浅野嘉久賞』授与式	07

医師の卒後教育を実現 ー野口グランドラウンドー	09
Externship レポート	11
40周年記念特集 Vol.1 皆さまへの感謝を込めて	13

Philosophy

私たちの想い

患者様優先の医療を目指して

Compassion

-Humanity & Empathy in Medicine-

米国財団法人野口医学研究所について

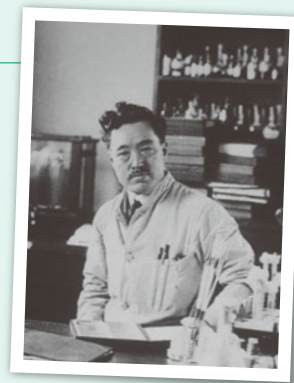
医師や医学生を始めとした医療従事者を対象に、米国での臨床留学プログラムを提供しています。

これまでに多数の医師・医学生の研修を支援し、患者様の痛みや苦しみに共感し

「私たちに治させて下さい」という精神で寄り添うことができる医療人の育成をしています。

03 野口英世博士の名言

自分のやりたいことを一所懸命にやり、
それで人を助けることができれば幸せだ。



コロナ禍を経て

2年ぶりの実施!

医学生・レジデント 向けイベント

@ハワイ大学

米国財団法人野口医学研究所は、2018年に設立したHedges-Izutsu-Asano Fundを通じ、第2回「Humanism, Empathy, Social Justice and Global Health Symposium(Asano Humanism Week)」をハワイ大学にて開催致しました。



ONLINE
LECTURE

Asano Humanism Week Hawaii, February 2022 Dr. Pohl's Lecture:

21世紀はテクノロジーの進化に伴う医療技術の進歩により、対処できる病気や症状の幅が広がりました。一方、テクノロジーが進化したことで医師と患者の間に距離が生じてしまっているのも事実です。その関係性を修復させるためには様々な方法があると言われていますが、臨床研究によって Empathy と Humanity (共感や思いやり) を持った治療や診療が一番効果的であると証明されています。トーマスジェファーソン大学(TJU)では、必修授業と選択授業の他に、50種類以上のキャンパスイベントやプログラム(Asano Humanities and Health Program)を開催するなど、カリキュラムにそれらを取り入れていると語るDr. Pohl。EmpathyとHumanityを通して医療従事者、患者、コミュニティなどの環境を守り、関係性を向上させることの大切さについて解説して頂きました。



当日は、野口医学研究所創立者 浅野嘉久より、講演者Dr.Pohlの紹介がありました。

Asano Humanism Week スケジュール

2/
9
(水)

『えひめ丸』追悼式

レジデンス講義

- ① "Trauma and Empathy" Dr. Charles Pohl
- ② "Indigenous Healing and Resistance in an Era of Climate Change Crisis" Dr. Kalamaoka'aina Niheu
- ③ "Trauma Informed Healthcare for Patients Experiencing Homelessness" Dr. Sheryl Recinos
- ④ "Fever, Feuds, and Diamonds: Ebola in West Africa" Dr. Paul Farmer

2/
16
(水)



Dr. Pohl



Dr. Niheu



Dr. Recinos



Dr. Farmer

2/
17
(木)

Better Tomorrow Speaker Series

Dr. Farmer "Who lives, who dies:
Re-imagining of global health and social justice"

Better Tomorrow Speaker Series とは?

世界的に有名な専門家や学生、教職員等を集めて、多岐にわたる分野の新たな研究にスポットライトを当て、社会問題に関する革新的な解決策を導き出す講演シリーズ。UHのさまざまなコミュニティ組織によって提供されている。



BETTER TOMORROW
SPEAKER SERIES

2/
18
(金)

医学生セッション

ファシリテーター

Dr. Niheu / Dr. Recinos

医学生向け臨床留学プログラム

野口×TJU
によるコラボ

初の
オンライン
開催!!

Clinical Clerkship

[Virtual] 2022

対 象：2021年選考会合格者・医学部4年生・5年生
研 修 先：トーマス・ジェファソン大学 (TJU)
研修期間：3月29日(火)～3月31日(木)

毎年3月に開催している医学生向け米国臨床留学プログラム「Clinical Clerkship」。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、オンラインにて現地の大学とつなぎ、3日間の集中プログラムを12名の学生を対象に実施しました。オンライン研修という新たな形で教育プログラムを実施することができ、参加者からも沢山の反響をいただきました。

通常の研修プログラム

木：チェックイン

金：オリエンテーション

土：フリー

日：フリー

月：

火：研修

水：研修

木：

金：修了式

約1週間の
研修

ぎゅっと凝縮!

約1週間を
3日間に集中!!



Clinical Clerkship (Virtual)

	AM	PM (21:00～)
3/29 [火]	●オリエンテーション ●4セッション	●1セッション
3/30 [水]	●4セッション	●1セッション
3/31 [木]	●4セッション	●1セッション

オンライン
集中講義!



3日間で学べること

- ☑アメリカの医療について
- ☑USMLE試験の準備に必要なこと
- ☑レジデントの面接に向けてのポイント解説
- ☑症例検討の練習(呼吸・心音など)
- ☑TJUの医学生とのディスカッション

- ☑CV・Personal Statementの書き方
- ☑米国式の臨床医育成
- ☑内科グランドラウンド(OBからのアドバイス)
- ☑JeffHOPE(医療ボランティア)について
- ☑アメリカのレジデントの1日の流れについて
- ☑医師としてのプロフェッショナリズムについて

※8～9割が英語でのセッションです。

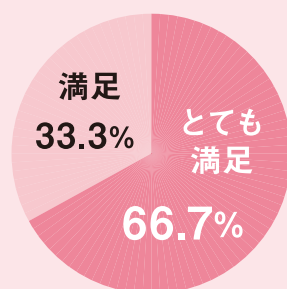


参加者の反響

12名中、12名が
“満足”と回答！

Q.
総合的に
どのくらい満足
していますか？

■ とても満足
■ 満足
■ どちらでもない
■ やや不満
■ とても不満



3日間のプログラムの中で特に人気だったのは、現地のレジデントとのセッション。アメリカで実際に働いている方の“生の声”を聞くことができ、アメリカでの勤務体系がよりイメージしやすくなり、多くの学生が刺激を受けたようです。



現地の学生と
直接ディスカッション
ができました！

医師として働くことに
関して見つめる
きっかけになりました！



米国での働き方
について詳しく聞けました！

意識の高い仲間
と出会えました！



大学の授業では
中々学ぶことができない
医療倫理や
プロフェッショナリズム
について
考えるきっかけができました。

Clinical Clerkship [Virtual]

に参加してみて



野口医学研究所
2022 Clinical Clerkship [Virtual] 参加
金沢医科大学5年
面 美来

プログラムを通じて学んだこと、気づいたこと

私が米国で医師をしようと決めたのは2年前でした。丁度新型コロナウイルスの感染が拡大し、Zoomが普及したことで、米国で臨床をされた日本人医師のご講演に遠隔で参加できるようになりました。多くの先生方の講演をお聞きしているうちに米国でInternal Medicine and Pediatrics Residency を経てトランジショナルケアや思春期医療に従事する医師になりたいと思うようになりました。しかしそれは、大変長く険しい道のように感じました。USMLEの受験、課外活動、CV、Personal Statement、米国での臨床経験、推薦状、マッチングへの参加、面接、そしてレジデンス、フェローシップ。高い壁の連続で、自分のできるのか不安に思っていました。しかしこのプログラムに参加して米国の医療について知り、目標を達成するためにやるべきことが明確になり、切磋琢磨できる仲間を見つけられたことでモチベーションが上がり、自ずと不安がなくなりました。そしてパッションと行動力、継続力があれば

米国で臨床医になる夢は実現可能であるということに気づくことができました。3日間のプログラムにおいて数々のセッションに参加しました。内容は多岐に渡り、米国の医学教育、レジデンスの応募、ディスカッション、グランドラウンド、循環器の講義、医療面接の行い方などあり、どれも大変興味深かったです。どのセッションにも共通することとして、スピーカーの方は皆、何かしらの強いパッションをお持ちで、それを原動力に医学を通して社会にいい影響を与えようとしていらっしゃいました。逆境があってもパッションで立ち向かい、結果が出なくても諦めずに努力を続けることを皆さん実践されていました。その姿勢が大変印象的でした。その姿を見て、大変な道のりであっても、目標から逆算して計画的にコツコツと努力をし、社会にどう貢献したいのかを見据えてパッションを失わなければ、成し遂げられないことはないということに気づくことができました。

ProfessionalismとCompassionについて学んだこと

トーマスジェファソン大学が特にMedicine is an art based on scienceを大切にしていると印象に残ったのはグランドラウンドを見学した時です。3回分のグランドラウンドを見学することができたのですが全ての回で歴史や社会情勢、環境問題を踏まえた上で医学、医療の話がされていたことが大変印象的でした。最初から医学を話すのではなく、時代の変遷に触れ、公衆衛生の視点を取り入れながらプレゼンテーションをされていました。また患者のSocial Determinants of Healthを念頭に最善のアプローチや時には啓発を行われており、患者を治療するだけでなく、医師の専門範囲を超えて、より良い社会になる

よう枠組みに捉われず積極的に行動されていることが大変刺激的でした。医学に詳しいだけでなく社会や歴史まで目を向けて行動して初めてProfessionalであり、患者に寄り添って治療をするだけでなく、社会復帰まで見届け、さらに社会全体の予防のために啓発活動までやって初めてCompassionであるということに気づかされました。私も真に患者の力になりそして社会にも貢献できる医師になれるようにこのことを肝に銘じて臨床に携わっていきたいと思います。患者を取り巻くSocial Determinants of Healthを踏まえて医療を提供し、社会全体に向けてアドボカシーができる医師になります。

ステロラ基金を通じて



未来の社会の礎となる
子供たちの健全なる育成のために

チャンプサッカークラブ の活動を支援



ユニホームの背中には
野口医学研究所のロゴが入りました!

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う社会活動の自粛は多くの企業・団体に大きな痛手を与えています。規模を維持し続けることは、未来のアスリートや良き指導者を育てるスポーツチームにとっても大変深刻な課題となっており、活動の継続や運営に苦慮しているのが現状です。チャンプサッカークラブでは、「子供たちが自ら考え、判断する力」

をつけられる環境づくりに配慮し、将来良き指導者としても活躍できる選手に育て上げるべく、活動を行っています。

野口医学研究所は、未来で輝くアスリートを目指す子供たちのために、ステロラ基金を通じて総額30万円の寄付を行いました。

卒業生の進路

海外

カンボジア
ベトナム
香港
モンゴル
スウェーデン など

Jリーグ、社会人リーグ傘下チーム

Jリーグ・名古屋グランパス、ロアッソ熊本、
アスルク・ロ沼津、Jリーグ・柏レイソル
U-15、U-18 (U-15、U-18日本代表)、FC岐阜、
Jリーグ・ファルレング長崎、FC相模原、
WEリーグ・アルビレックス新潟 など

全国高校サッカー大会出場高校進学先

桐蔭高校、桐光高校、日大日吉、日大藤沢、山形羽黒、前橋育英、国学院久我山、帝京高校、長崎総科大附、帝京長岡、湘南工科大附、関東第一、修徳高校、駒大高校、国士舘高校、久留米総合高校、日本文理、松本国際 など

管理栄養士の
研究活動を
応援！



女子栄養大学大学院
女子栄養大学



※一時的にマスクを外して撮影しました。

女子栄養大学大学院入学生奨励 第8回「浅野嘉久賞」授与式

米国財団法人野口医学研究所(所在地:東京都港区、創立者・名誉理事 浅野嘉久)は、2022年6月29日(水)に女子栄養大学・坂戸校舎に於いて第8回「浅野嘉久賞」の授与を行いました。「浅野嘉久賞」は、当財団の創立者・名誉理事 浅野嘉久個人が、女子栄養大学大学院修士課程に進学する優秀な人材に対して研究の質の向上と高度専門職業人養成を目的として授与するもので、今年度は4名を選出し、授与式にて給付決定通知書を手渡しました。今回の授与式も昨年同様、マスク着用、手指の消毒、ソーシャルディスタンスの確保等、新型コロナウイルスの対策を厳重に行い、開催しました。

■ 女子栄養大学大学院入学生奨励「浅野嘉久賞」奨学金

対 象 学部成績が優秀、かつ卒業研究に熱心に取り組んでいて、卒業研究の指導教授の推薦があり、さらに大学院入学試験に優秀な成績で合格した者。

募集人数 4名

内 容 1年次 300,000円／2年次 300,000円 計600,000円を給付

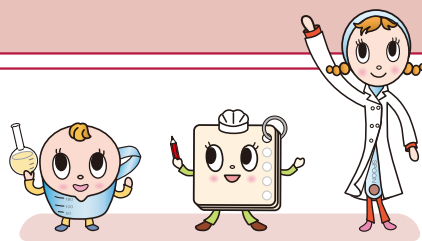
浅野嘉久賞	第1回 2015年4月8日 … 2名	第5回 2019年4月10日 … 4名
	第2回 2016年4月6日 … 2名	第6回 2020年7月15日 … 4名
	第3回 2017年4月5日 … 2名	第7回 2021年6月9日 … 4名
	第4回 2018年4月11日 … 2名	第8回 2022年6月29日 … 4名



受賞者へ浅野嘉久よりメッセージ



授与式の様子



受賞者 インタビュー

高齢者の フレイル予防ツール について考える

女子栄養大学
地域保健・老年学研究室
(大学院1年目)
あかお るる
赤尾 瑠琉さん

Q1. 女子栄養大学大学院で 研究しようと思ったきっかけは何ですか？

大学2年次のインターンシップ実習で障がい者支援施設に訪問する機会がありました。実際にご高齢の方とお話したとき、想像していたよりも明るく朗らかで、障がいや疾病を有しながらも趣味に勤しみ、自立して生活している姿が印象的でした。そのような方々が社会的弱者として認知されるのではなく、むしろ社会で活躍できる存在であることをアピールしたいと考えるようになり、卒業研究は「心身のアンチエイジング」をテーマにライフステージ別の体質に合わせたレシピ提案を行いました。そうしたレシピをウェブサイト上で発信していたのですが、対象者の声を収集できず効果が実感できないこと、自身のデータ解析力が不足していることにもどかしさを感じていました。そこで、高齢者保健や栄養疫学の専門知識を身につけたいという実践的なヘルスプロモーションに携わりたいと思い、大学院への進学を決めました。

Q2. 研究内容について 教えてください

高齢期における多様な食品摂取は栄養素密度が高く、フレイルや低栄養などの健康アウトカムと関連することが報告されています。しかし、消化吸収や嚥下機能の低下等の身体的な要因から独り暮らし世帯の増加による孤立といった社会的な要因で様々な理由が重なり、粗食傾向になる高齢者も多く存在します。そこで、毎日でもくとも習慣的に多様な食品を摂取できるよう、継続的に摂取記録をして不足する食品を見直すことで食生活改善と疾病予防ができるのではないかと考えました。といったただ記録をするのではなく、メニュー提案や専門家によるフィードバック機能のあるアプリを導入するなどモチベーションアップにつながる工夫が必要だと思います。

Q3. この研究を通して実現したいこと、 今後の展望についてお聞かせください

超高齢社会は喫緊の課題ではありますが、単に高齢者割合の増加が経済成長や社会保障に影響を及ぼしているわけではありません。平均寿命と健康寿命の差をできるだけ小さくし、社会で活躍する元気な高齢者が増えれば、社会保障費の抑制、健康格差の縮小、さらには個人の人生を豊かにするQOLの向上にもつながります。つまり、高齢者を支える社会システムを構築するよりも高齢者も社会の一員として活躍できる地域づくりと健康支援が必要なのではないでしょうか。そうした社会を実現していくために、女子栄養大学で培った「食」という最も身近な観点からアプローチして修士課程の研究に努めていきたいです。



指導教員の新聞省二教授と



医師の卒後教育を実現 ー野ログランドラウンドー

卒後1年から
指導医
対象

野ログランドラウンド

“生涯教育”という概念を基に、卒後1年～指導医まで全ての医師を対象としたオンラインセミナーの事です。「学び」は学生だけのものではなく、急激に変化する時代に取り残されないように、生涯を通して行う必要があります。当セミナーでは、月に一度、現役の医師がスキルアップを図れるよう、旬の話題をテーマに、現場で実践できる内容についてお話ししています。

第8回「COPDマネジメント」

2022.1.12(水)



講師:

榎川 紗理

クイーンズメディカルセンター
内科医
(集中治療・COPD専門)

呼吸器症状が持続して起こるCOPD(慢性閉塞性肺疾患)。日本は40歳以上の有病率が8.6%、年間の死亡数は約2万人に上り、世界的に見ても増加傾向にある疾患です。ハワイでの呼吸器集中治療のご経験を元に、現在アメリカで行っているCOPDの検査や治療法、予後予測、さらにはCOVID-19との関連性などを詳しくお話ししました。

第9回「ベッドサイドからの呼吸器疾患の展開」

2022.2.9(水)



講師:

喜舎場 朝雄

沖縄県立中部病院
呼吸器内科部長

COPD(慢性閉塞性肺疾患)マネジメントについて、「COPDを疑う情報」「気管支喘息と心不全について」「間質性肺炎の捉え方」を焦点にお話ししました。喜舎場先生がモットーにしているのは「ベッドサイドに答えはある」という言葉だそうです。専門的な内容はもちろん、患者と真摯に向き合うことの大切さが学べる内容でした。

第10回「急性腹症を通して医師の能力を知る」

Acute abdomen and Learning 6 Competencies

2022.3.9(水)



講師:

町 淳二

ハワイ大学
外科教授

医師に必要な6つの能力について、研修医4名と急性腹症の症例を検討しながらインタラクティブな講義をして頂きました。普段ではあまり考える機会のない、「診療ミスの対応について」ディスカッションの場を設けられる等、実践的で非常に勉強になる会でした。

第11回「あなたが高齢入院患者の担当になったら」

ー明日から使える「5つのM」ー

2022.4.13(水)



講師:

山田 悠史

マウントサイナイ医科大学
老年医学・緩和医療科フェロー

高齢者診療において年齢よりもGait Speedなどの「フレイルティ」を身体機能の評価の一つとして取り入れるケースが多々あります。高齢の患者さんと向き合うための医師としての考え方や治療方針の決め方について、アメリカのマウントサイナイ医科大学で実践されている「5つのM」の視点から解説頂きました。

第12回「生活習慣病管理を立体的に把握するために必要なこと」

ー公衆衛生と当院外来での実践ー

2022.5.11(水)



講師:

中村 康宏

虎ノ門中村クリニック
院長

患者さんのバックグラウンドを捉えるためには公衆衛生学が活用できます。高齢者施設で現在80件ほどの訪問診療を行っているという中村先生。今回は肥満の外来診療に関して、「医学」だけではなく、「公衆衛生学を踏まえた“生活習慣病”」の視点から解説して頂きました。

第13回「家庭医療と女性のキャリアプラン」

2022.6.8(水)



講師:

堤 美代子

家庭医・総合診療医

2児のお子さんを持ちながら家庭医として活躍されている堤(滝沢)美代子先生に、診療事例を交えて普段の仕事内容について教えて頂きました。また、女性がキャリアを積み上で多くの方に立ちはだかる壁、「結婚」「家庭」について、様々な選択肢があることをお話いただきました。



祝1周年! 私の病院ではこの様に活用しています!

野口グランドラウンドを開始して1年が経過しました。お蔭様で回を追うごとに徐々に参加者が増え、会議室に大きなスクリーンをご用意頂き、複数の皆さんで参加して下さっている病院もあります。毎月第2水曜日12:30~13:30のお昼の時間に、参加者の皆さんはどのようにグランドラウンドを活用して下さっているのか伺ってみました。



Interview

野口グランドラウンドの 位置づけと活用方法

— 聖マリアンナ医科大学の場合 —

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 救命救急センター
聖マリアンナ医科大学 救急医学 講師

北野夕佳 先生

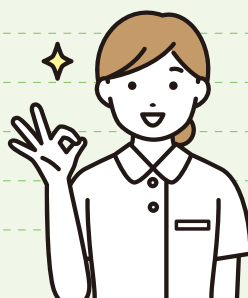


**野口グランドラウンドは病院内で
どんな位置づけになっているか。
どの様に役に立っているか。**

救命救急センターでは初期・後期研修医の教育としてはもちろんですが、特にNP(診療看護師)さんの知識の底上げに非常に役立っています。NPさんは一般看護師よりも専門性が高く、医師が担当する仕事の一部を担うことができるため、医師とNPさんの連携は非常に重要です。私の所属する救命救急センターには常に3~4名のNPさんがおり、彼らがいてくれることで臨床現場を上手くコントロールできているといえます。後期研修医と診療しているのと同じ感覚です。医療にはオーダーや電話などの雑務がかなり多いため、指導医だけでは全てを回しきれません。そのため、NPさんの知識の底上げをしておくことで医師が非常に楽で、雑務に追われることなく診療に集中することができますだけでなく、最終的にとても患者さんの役に立つので本当に助かっています。また、多忙の中では初期・後期研修医とNPさん合同での教育時間を確保することが難しい状況にあるため、野口のグランドラウンドや他の勉強会があることによって、結果として定期的に勉強会に参加することができ、全体的に成長することができています。各施設で教育プログラムを準備して実施するよりもよほど能率が良いですし、とても上手くいっています。

**野口グランドラウンドに
参加して得たことで、
実際に活用していること。**

個人的なことで言えば、糖尿病内科外来に関するお話は特に勉強になりました。救急外来が専門分野である私にとって外来糖尿病管理はあまり得意ではないのですが、それでも外勤先で糖尿病患者を診ることはあります。そういう時には野口グランドラウンドで学んだ内容が非常に役立ちますし、しっかり現場で活かすことができています。また、例えば問診や診察が大事だと一人が言っているだけだとあまり説得力がありませんが、どの先生も同じことを言っていると知ること、若手に問診や診察の重要性が伝わりやすくなっているように思います。更に、歯科を取り上げた回は「今までにない視点を得られた」と指導医からも非常に好評でした。所属科以外のお話を聞くことができる病院はとても少ないですし、どの回も本当に勉強になるのでありがたいです。



米国の臨床現場の一端を垣間見ることが出来ました

横須賀米海軍基地病院 日本人フェロー
高橋侑也先生

研修期間：2022年5月30日～6月17日
研修科：内科
研修施設：トーマス・ジェファーソン大学病院



Chinatown Clinic等でお世話になったDr. Lauと修了式にて(写真右：高橋先生)

私はトーマス・ジェファーソン大学病院の内科にて3週間のエクステンシブに参加させて頂きました。内科の病棟チームに配属となり、回診・ミニレクチャーなどに加えて頂きました。オブザーバーシップの性質上、患者さんに触れることは出来ないこと、カルテへのアクセス権が無いことから、シャドウイングが中心でした。

自分にとって一番印象深かったのは医学生の臨床能力が非常に高いと感じたことです。問診・身体診察・データなどから必要な治療方針を自分で発案しアテンディングにプレゼン、大きな修正も無くそのまま実行されていたのが印象的でした。医学生は既にカレッジを卒業しているため人間としてより成熟していることなどが影響するため、一概に比較するのは困難とは思いますが、日米間における医学教育の差をまざまざと感じることが出来たように思います。自分が学生の頃は、たとえ日本語であっても、彼らのように能動的に患者を診療する能力は無かったです。学生主導のボランティアクリニック(JeffHOPE, Chinatown Clinic)に参加する機会もあり、そこでも学生たちが主体的に患者を診療する姿を目にし、感銘を受けました。日本でもこのような機会がもっと広まれば、卒後すぐに感じる学生と研修医のギャップを縮めることが出来るため良いかと思います。

米国の内科病棟チームがどのように機能しているかを直接見学することが出来たのも、内科レジデントとして渡米を目指す自分にとって貴重な経験となりました。患者さんを包括的に管理し、他科コンサルトやソーシャルワーカーとの調整などを行っていました。腹腔穿刺、CV挿入なども専門家コンサルトすることが多く、内科レジデントが手技をする機会が少ない、といったお話も伺いました。レジデントが行う手技数はプログラムによって違いがあるとのこと初めて知り、今後マッチングで

プログラムを選ぶに当たって注意しようと思いました。

内科ローテーション以外にも、救急外来の見学、学生主導のボランティアクリニック(JeffHOPE, Chinatown Clinic)への参加、など充実した研修スケジュールを組んで頂きました。また、USMLEの受験をするためにスケジュールを調整してくださったりと、非常に柔軟に対応して頂きました。休日にはNYを訪れたりしてアメリカ生活を満喫しました。

最後になりますが、病棟チームに迎え入れてくださったアテンディングのDr. WangおよびDr. Stewartをはじめ、レジデント・インターン・医学生の皆様に感謝申し上げます。Chinatown clinic 懇切丁寧にご指導くださったDr. Lau、またこのような貴重な機会を与えて頂き、渡航準備など大変丁寧に対応してくださった野口医学研究所の皆様、現地で生活などのお世話を頂いたラディ様、その他すべての皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



TJU周辺の景色

研修を知ろう!



1日のスケジュール(例)

チーフレジデントと
打ち合わせ

チームラウンド



医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、医療ソーシャルワーカーなど、多職種のチームでラウンド(回診)します。

Noonカンファレンス



研修医による症例発表や臨床医による研修医向けの講義など、実践的な知識を得る勉強の場となります。

AM
8:30

AM
12:00

米国の総合内科診療を見学して

亀田総合病院 呼吸器内科
谷口順平先生

研修期間：2022年8月8日～8月26日
研修科：内科
研修施設：トーマス・ジェファソン大学病院



Chinatown Clinic等でお世話になったDr. Lauと修了式にて(写真左:谷口先生)

この度、私はThomas Jefferson University HospitalでInternal Medicineのexternshipをさせていただきました。Thomas Jefferson UniversityはPennsylvania州Philadelphiaの中心部に位置する900床規模の総合病院で私はそのInternal medicineのGreen3というチームに配属させていただきました。Green3はAttending 1人、Resident 1人、Intern 1人、他科から研修に来ていたPsychiatry-resident 1人、3rd-yearのMedical student 2人というチーム構成で、概ね10人～15人の患者を受け持っており、毎日1～2人程度の新入院患者がいる状況でした。いわゆる総合内科として患者を担当しており、入院患者の内訳としては肺炎、尿路感染、感染性心内膜炎、HIV関連合併症、薬物中毒などの患者が最も多かったですが、ERから依頼のある原因不明の貧血や発熱、意識障害などの未診断の症例も担当していました。ResidentとInternが日本でいう内科専攻医の役割を担っており、全ての入院患者を2人でsuperviseしていました。Medical studentが日本でいう初期研修医の役割で担当患者のプレゼンや診察などの役割を主に担っていました。Attendingは日本でいう主治医ですが、実際に担当医として診療に関わることはほとんどなく、教育的な役割や方針確認のみを担っていました。

1日の流れとしては朝8時半～9時頃にAttendingが合流するのでここではまず新入院患者のラウンドを行います。ベッドサイドにてフルプレゼンテーション＋詳細な身体診察＋病態のディスカッション＋方針決定まで行うので、1例に1時間以上かけることも稀ではなく、米国医療のベッドサイドラーニング中心の臨床指導を重要視する教育内容に深く感銘を受けました。新入院患者以外で安定している患者は簡単にラウンドしながらその日の方針や状況を共有しておりましたが、回診の度にプレ

ゼンとディスカッションが行われるので、概ね午前中一杯は回診で終了しました。午後はNoon conferenceというInternとResident向けの教育的なレクチャーが開催されていたのでそれに参加させて頂いたり、現地の先生のお力を借りてOncologyやIntestinal pneumoniaのOut patients clinic、気管支鏡、ICU、Pulmonary fellowのコンサルトなどを見学させて頂いたりしながら比較的ゆったりと過ごしていました。

世界中から優秀でハングリーな医学生と医師が集まる米国の環境はとても刺激的で普段の自分の臨床姿勢やキャリアを見直す良い機会となりました。また日米の医療制度の違いもしっかりと感じることができ、双方のメリットとデメリットを深く体感する良い機会ともなりました。コロナ禍と家族の事情が重なり、渡米する2カ月前に突然研修が決定した私のexternshipでしたが、思い切って参加して非常に良かったと感じています。最後にこのような機会を与えて下さった野口医学研究所の皆様、研修を受け入れて下さった大学やチームの皆様、また現地でサポートした下さったJapan CenterのNakamuraさん、現地で活躍され様々な見学の機会や情報を提供して下さいました日本人Drの方々に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



大学のあるPhiladelphiaの美しい街並み

フリー時間



予習
復習



施設
見学

医療ボランティア



チャイナタウンにあるクリニックやTJUの医学生が中心となって活動するJeff HOPEにて、医療ボランティアに一医療人として参加します。

PM
1:00

PM
6:00

PM
8:30

40周年
記念特集

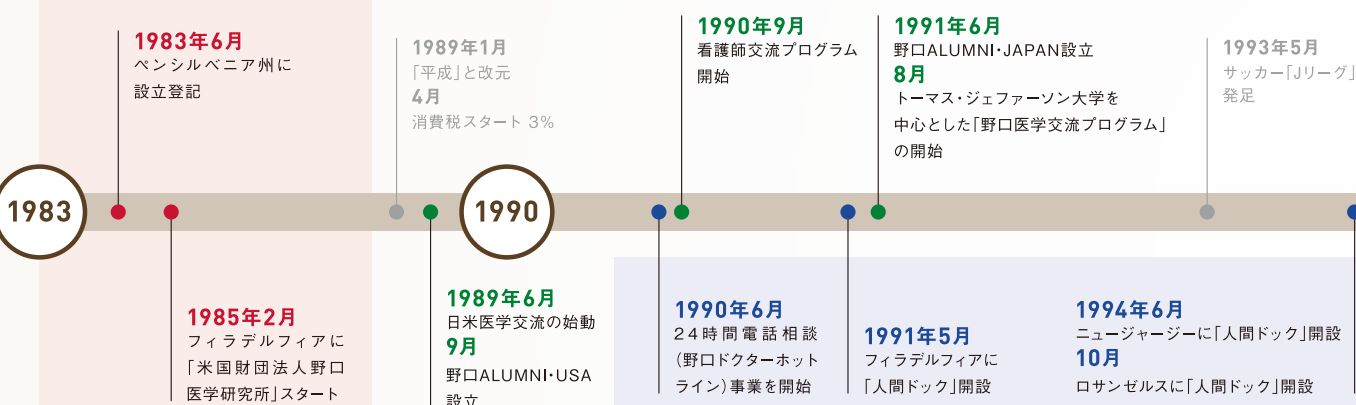
Vol.1

皆さまへの 感謝を込めて

2023年、米国財団法人野口医学研究所は創立40周年を迎えます。「40周年記念特集」では、これまでの軌跡を振り返り、これからの医学教育&交流活動への展望などを語っていきます。



軌跡



野口医学研究所のはじまり



戦後の日本の医学は、米国の最新医学を導入することで著しい発展を遂げましたが、1970年代後半には、外国人医師への門戸が閉ざされたことから米国で臨床研修を受ける日本人医師はほぼゼロとなり、欧米に大きく遅れをとることになりました。そしてこの状況に危機を抱いた故・浅倉稔生教授（ペンシルバニア大学）は、野口英世ゆかりの地であるフィラデルフィアに野口英世を記念とする財団を設立し、日米の医学交流を促進することで第二・第三の野口英世を誕生させる構想を描きます。これがきっかけとなり、野口医学研究所が誕生したのです。

戦後の日本の医学は、米国の最新医学を導入することで著しい発展を遂げましたが、1970年代後半には、外国人医師への門戸が閉ざされたことから米国で臨床研修を受ける日本人医師はほぼゼロとなり、欧米に大きく遅れをとることになりました。そしてこの状況に危機を抱いた故・浅倉稔生教授（ペンシルバニア大学）は、野口英世ゆかりの地であるフィラデルフィアに野口英世を記念とする財団を設立し、日米の医学交流を促進することで第二・第三の野口英世を誕生させる構想を描きます。これがきっかけとなり、野口医学研究所が誕生したのです。

寄付の呼びかけとメディアへの露出

設立後は、日米の医学交流を通して日本の医学教育を発展させるべく、新聞やテレビなどのマスメディアを通じて活動への支援（寄付金の募集）を呼び掛け、これにより多くの寄付金が集まりました。



私が40年間大切にしてきたこと

もう40年が経過したのかと思うと感無量です。1983年に設立してから今日を迎えるまで、決して平々凡々な日々ではありませんでしたが、40年間も組織を存続できたのは、野口医学研究所に対する忠誠心があったからに他なりません。アメリカで見た医学を日本に定着させることが私の使命であると強く感じ、ここまでやって参りました。設立当初、全米No.1の小児病院・CHOP (Children's Hospital Of Philadelphia) で見たのは、小児科に新生児をケアするインキュベーター (保育器) を置かず、「病室そのものを保育器にしよう」という実に画期的な医療システムでした。当時世界でNo.1と謳っていた日本の医学が30年、看護学に至っては80年もアメリカより遅れをとっていることを知り、頭を殴られたような衝撃を受けたことを覚えています。

そうした日本の医学界に危機を抱いていた真の創業者、浅倉稔生先生から声をかけられたのがきっかけで、私は野口医学研究所の専務理事を務めるようになりました。恩師である彼がいなかったら、今の野口医学研究所は存在していません。更に、一度職を辞した際に声をかけてくださった岐阜大学名誉教授の尾島昭次先生や、「浅野なくして野口医学研究所はない。意志を貫いてくれ」と語りかけてくれたトーマス・ジェファーソン大学のジョセフ・ゴネラ先生らの存在がなければ、活動を続けることはできなかったでしょう。今まで野口に携わった人たちを一人として忘れてはいけないというのが私の考え方です。「信義」と「誠実」。これまで紆余曲折がありながらも、人との出会いと報恩の心が、今日の野口医学研究所を形成しているのです。



野口医学研究所 創業者
浅野嘉久

次回の
野口タイムズ
へ続く



1995年1月
阪神・淡路大震災

1997年10月
歯科部会設立
12月
医学交流セミナー・
選考会実施

2001年9月
米同時多発テロ発生

2002年2月
第1回歯科部会
セミナー実施

2003年8月
ハワイ大学に於ける
医学生向けプログラムの
作成と実施

2008年7月
iPhone
日本で発売

2000

1995年5月
ハワイに
「人間ドック」開設

1999年2月
北京・上海等中国4ヶ所に
「人間ドック」開設

2001年10月
サンパウロに
「人間ドック」開設

2003年12月
テレビ
地上デジタル放送
開始

2009年3月
ハワイ大学にて
Endowment Fund (寄付基金) 設立
7月
第1回夏期臨床医学教育セミナー実施

野口を支えたビジネス「野口ドクターホットライン」「人間ドック」

寄付には常にトラブルが絶えなかったため、寄付による資金集めではなく自身の力で資金を捻出しようと、野口医学研究所独自で医療ビジネスを展開することとなりました。そのうちの一つが人間ドックであり、世界各国 (海外) に駐在する日本人の健康管理を日本人医師や看護師がサポートし、日本語で診察する医療機関として開設されました。これにより、海外在住の方や旅行・出張等で渡米中の方々が言葉の障壁に悩まされることなく利用できる医療システムが誕生しました。



■当初の医療ビジネス

- ①1990年～
野口ドクターホットライン
- ②人間ドック
1991年～フィラデルフィア
1994年～イングルウッド、
リトルカンパニー オブ メアリー・ホスピタル
1995年～ストロウブクリニック (ハワイ)
1999年～上海 他中国4か所
2001年～サンパウロ

寄付に
頼らない
組織へ



Noguchi Times

Vol.29

発行日：2022年11月

編集：〒105-0001東京都港区虎ノ門1-12-9

スズエ・アンド・スズエビル4階

TEL.03-3501-0130

米国財団法人野口医学研究所

<http://www.noguchi-net.com>